OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	戦前期日米学生会議と日比学生会議　ー1930年代の「文化国際主義」における「中心性」と「周縁性」のメカニズム
Author(s)	中村, 信之
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/72294
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　中村　信之　）	
論文題名	戦前期日米学生会議と日比学生会議 ―1930年代の「文化国際主義」における「中心性」と「周縁性」のメカニズム

論文内容の要旨

本稿は日本英語学生協会が運営した戦前期日米学生会議（Japan-America Student Conference、略称はJASC）と日比学生会議（Philippines-Japan Student Conference）という二つの「国際文化交流」を題材にしたものである。「国際文化交流」は、広義には人々による国境を越えた交流を意味し、意図的に行われるヒト・モノ・カネ・情報の国際移動の全てを含み、狭義には政府や民間が主体として行う交流事業を指し、本稿では後者の意味で使用している。「国際文化交流」研究は、「国際文化交流」を闇雲に肯定する「国際文化交流性善説」と、十分な検討が無いまま否定的に捉える「国際文化交流性悪説」という二極構造で解釈される傾向がある。これは「国際文化交流」が「官」「民」の関係性において解釈される傾向にあり、「官」の要素は権力機関による宣伝によって民意が統制されるプロパガンダのように否定され易く、その対極にある「民」の要素はヒューマニズムやフィランソロピーといった普遍的な価値と否応なしに結び付けられ易い。本稿では「国際文化交流」はこの二極構造では把握しきれない多元的な構造を持っているという仮説の下、両学生会議を事例に「国際文化交流」におけるアクター、思想、「ナショナリティ」、「人種」、「エスニシティ」といった要素に着目し、「国際文化交流」における多元的構造を明らかにすることを目的としている。

また「国際文化交流」は「文化国際主義」の概念によって、国際関係論に位置付けられてきた。「国際主義」は諸国家の関係を国家相互間の協力や交流によって再構築しようとした理念、運動、制度を指す。これに「文化」という「意味の構造」のシステム性をその概念に加えることで、権力に囚われない「文化」同士が国境を越えて自由にコミュニケーションを図る国際関係のダイナミズムを捉えることが期待された。その一方で「文化」はその外枠に恣意的な境界線を引いて初めて現れる要素であり、「国際文化交流」研究は「文化」同士の関係性を分析するだけでなく、その境界線のもつ意味を検討するべきであり、本稿では「文化国際主義」それ自体がもつ「文化」と「国際」の境界線について考察することをもう一つの目的としている。

先行研究で描き出された戦前期JASCと日比学生会議は、「民」であるはずの「国際文化交流」に「官」の善導という関与があり、それは国際親善という普遍主義的な平和主義を理念として持ちながら、「日本人」学生は政府の帝国主義的政策の一端を担うという二極関係で理解され、結果として理念と実践の自己矛盾に陥っていたのが戦前期JASCと日比学生会議であり、それが当時の「国民外交」の在り方であるというものであった。

両学生会議が「国際文化交流」という事業として設立された背景には、「西洋」で発祥した「文化国際主義」が自らの「西洋文化」を「中心」と位置づけ、「非西洋世界」を「周縁」化したという「文化」のメカニズムが存在した。日本の「国際文化交流」は「対支文化事業」で中国を「周縁」化し、また他方で北米における「日本人移民」を汎民族主義によって「海外出生同胞」という拡大された「日本人」であると捉え、彼らの権利を守ることで「日本民族」の「中心」化を図った。「文化国際主義」は行き過ぎた植民地闘争や第1次世界大戦といった世界戦争を抑止する現実主義的な手段となることが期待されたが、日本の「国際文化交流」は平和への希求という普遍主義的価値を実現するというよりも、むしろ「東西文明融合論」という近代日本ナショナリズムと強く結びついて生まれた。

戦前期JASCは参加学生のみならず、運営方針は顧問会によって決められ、顧問には外務省、文部省といった政府職員や大学教授という教育関係者が参加していた。日本側学生のイニシアティブによって誕生した戦前期JASCは、アメリカ側の学生を「満州」に訪問させ、日本の対中国政策の「正しさ」を理解してもらうという明確な「コード」を有しており、この「コード」は「官」「民」に関わらず日本側関係者が共有していたものであった。また戦前期JASCには日系二世参加者が日本側としても、アメリカ側としても参加し、「日系人」という「エスニシティ」そのものを「コード」として発信することで、戦前期JASCを自らの「エスニシティ」を肯定的に捉える「場」として位置付けていた。1930年代は多くの二世が日本へ留学し、また日米間における「国際文化交流」の参加者となっていたが、この背景の1

つに「人種ナショナリズム」によって「周縁」化されてきた自らの「エスニシティ」を、「祖国」日本の「文化」を身に付けることでより肯定的に捉える「ヘリテージ教育」観があった。しかし「文化」と国家が結び付いた1930年代の「文化国際主義」においては、「一国一文化」の原則の下、単一国家に帰属するべきであるという考えが主流になり、日本において二世は血族主義に基づいた「海外出生同胞」の「日本人」と見なされる傾向にあった。日本英語学生協会の有力な顧問であった杉森孝次郎をはじめ、戦前期JASCの学生の中には二世のトランスナショナルな二重性を否定的に捉える者もいた。一方で戦前期JASCには、二世のトランスナショナル性を長所として捉えた二世教育観を実践している恵泉女学園から顧問と参加者を輩出していた。またアメリカの「日本人移民コミュニティ」と交流し、二世参加者と交流することで、二世のトランスナショナル性を肯定する「日本人」参加者も現れた。戦前期JASCは「国際」では捉えられない多元的なアクターが存在し、「官」や「民」の中にも「エスニシティ」や「人種」をめぐる思想の多様性がみられた。

アメリカ側学生の「コード」は、日本開催のJASCで度々政府関係者や右翼団体による監視がみられたことから、「オブザーバー」が分科会へ立ち入ることを禁止させ、学生会議を全体主義から切り離すことで、開放的・人道的な人間観を実現させようとするものであった。これに賛同した日本側参加者は顧問会に議題として持ち込み、その結果1938（昭和13）年第5回以降のJASCでは、学生以外の「オブザーバー」が「分科会」へ立ち入ることが禁止される「日米両国学生委員会協約事項」が適用されることとなった。このことは戦前期JASCが日本の「国民外交」であるだけでなく、アメリカの「国際文化交流」であることも意味し、また「文化触変」を通じてアクターが影響し合う空間であったことを意味しているともいえよう。

日比学生会議を支援していた国際学友会は「国民外交」機関であると同時に、日系二世やアジアからの留学生を日本帝国の共鳴者として育成する、「移植民教育」機関でもあった。日比学生会議に参加した「フィリピン人」学生は日本留学を希望していた者が多く、日比学生会議は優秀な「フィリピン人」学生を日本へスカウトする「場」でもあり、これは「国民外交」と「移植民教育」の連関性を示す例といえよう。先行研究は日本の一方的な政治宣伝の手段として日比学生会議を解釈しているが、「日本人」女学生が「フィリピン人」女学生と交流したことで、日本の女子教育に対する変革の必要性を認識した事例や、日本人初の女性外交官として活躍した山根敏子が会議終了後にも「フィリピン人」参加者たちと交流を続けたことは、日比学生会議は日本がフィリピンを「南洋」政策の一部として「周縁」化しようとした事実を裏付ける一方で、日比間の学生が双方的に「文化」を学び合い、影響し合うという「文化触変」の空間であったことも示している。また「日本人」参加者と「フィリピン日本人移民」との交流が重要視され、その中で「ベンゲット移民」の「英雄談」が参加学生を通じて日本に伝えられたという事例は、日比学生会議が常に「国際」的な交流を表象しているとはいえず、日本が「日本人優越主義」を裏付けるため、フィリピンから「日本文化」を「逆輸入」するという内向きな構図を持っていたことを示している。

「文化国際主義」は「人種」主義と共存していたという矛盾があると同時に、それ自体が内包する「文化」の境界線ゆえに「自己」性と「他者」性が発生し、「国際文化交流」における「中心」化と「周縁」化というメカニズムを生み出した。また「文化国際主義」における「国際」は、「文化」が国家の概念と同一視され、「一国一文化」という単一国家への帰属の強要や、「エスニシティ」と「国民」の混同、また「エスニシティ」と「人種」との混同生み出し、日系二世にように「祖国」と「母国」が二重になるというトランスナショナルな性質は「国際文化交流」においてしばしば「周縁」化の対象となった。「文化国際主義」は権力機関の関係性のみで描かれる国際関係を乗り越える可能性をもっているが、その「文化」の境界線とその恣意性に注目することも、これからの「国際文化交流」研究に求められよう。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　中　村　信　之　）		
	（職）	氏　名
論文審査担当者	主査　教授　中嶋啓雄 副査　教授　山田康博 副査　准教授　中内政貴	

論文審査の結果の要旨

この博士号請求論文は、戦前期の日米学生会議と日比学生会議を対象として、従来、自由主義的（ウィルソン的）国際主義の一環と見なされてきた「文化国際主義」が、諸国民・諸エスニック集団間に階層秩序、すなわち「中心性」と「周縁性」を生成していたメカニズムを解明したものである。一次史料としては、国立公文書館アジア歴史資料センター（デジタル・アーカイブ）で公開されている外務省外交史料館（東京都）所蔵の外交文書、メリーランド大学ホーンベイク図書館（メリーランド州カレッジパーク）、インターナショナル・ステューデント・カンファレンス事務所（ワシントンＤＣ）、日米学生会議事務所（東京都）所蔵の日米学生会議関連文書、コロンビア大学稀覯本・文書図書館（Rare Books and Manuscript Library）（ニューヨーク）所蔵のカーネギー国際平和基金文書、国立国会図書館（東京都、京都府）、フィリピン大学ディリマン校図書館（ケソン）所蔵の日比学生会議関連文書といった当該主題に関わる史料をくまなく渉猟し、さらに国際文化振興会（独立行政法人・国際交流基金の前身）の刊行物や同時代の新聞や雑誌も駆使して、先行研究を乗り越える高い実証性を持っている。

具体的には1930年代、日系移民や満州の問題に揺れた日米関係や、将来の独立を約束されたアメリカ合衆国の植民地フィリピンと「東亜新秩序」を掲げる日本との同時代の関係を、後に日米両国で多くの著名人を輩出し、今日まで続く日米学生会議（論文執筆者も参加者の一人）や、日比学生会議という大学生の文化交流事業に焦点を当てて論じている。日本政府関係者、男女の日本人学生、合衆国のヨーロッパ系（白人）コミュニティ、日系アメリカ人、フィリピン人学生、フィリピンの日系移民といった諸アクターの交錯が織りなす権力性や、そこにおける自由やジェンダーをめぐる規範の揺らぎを遡上に載せて、「学生の、学生による、学生の会議」といういわゆるリンカーン神話を再検討し、「文化国際主義」の内実を鋭く洞察している。

全体の構成としては、序章で先行研究を整理し、問題の所在を明らかにした上で、第１章では両大戦間期の国際文化交流の歴史的背景を述べて、日本政府が推進した「対支文化事業」、アメリカ合衆国における日系移民問題、外務省文化事業部の設置等、この時代の国際文化交流を規定した諸問題や政府内における国際文化交流事業の制度化が、詳細に説明されている。第２章では日本英語学生協会による日米学生会議の創設が綿密に跡付けられ、第３章では戦前期日米学生会議の活動について、特に同会議に参加した多くの日系二世に焦点を当てて論じている。そして、「海外出生同胞」として日米両国の架け橋として期待された彼らに対する教育、いわゆる「移植民教育」を施す一種の民間外交――当時の呼称では「国民外交」――が、戦前期日米学生の重要な側面であったことを実証的に明らかにしている。また、言論の自由や男女平等といった規範が、日系二世から日本人学生に伝わった点も指摘している。第４章では日米学生会議のいわば姉妹会議であった日比学生会議について論じられており、同会議が日系の「ベンゲット移民」の功績を神話化し、日本の帝国主義の一端を担いつつ、フィリピン人学生が女性の権利について日本人学生を感化し、その中から日本初の女性外交官・山根敏子のような人材が育ったことに注意を喚起している。そして、最後に戦前期日米学生会議、日比学生会議双方が、一方で国際文化交流の場でありながらも、他のアジア諸国の文化を「周縁化」し、日本文化を西洋文化同様に「中心化」する試みでもあったと結論づけている。

論文執筆者の用いる「国際文化交流」という言葉、あるいは国民やエスニシティの概念が若干厳密さに欠ける点、また移民問題との関係でさらなる先行研究の渉猟の必要性は課題として残されているが、審査委員会は一致して提出した論文は博士（国際公共政策）の学位を授与するに値すると認定した。